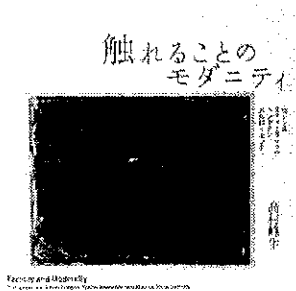


触れることのモダニティ

ロレンス、ステューグリッツ、ベンヤミン、
メルローポンティ

高村峰生著

〈西洋の伝統において、視覚が「最も高貴な」感覚とみなされてきたとすれば、触覚は階級的に最も低いものとして位置づけられてきた〉〈触覚のモダニスト的「真実」はまた原始的なものや始原的なものと深く関わっており、近現代のテクノロジーの理想と相反する価値を体現〉〈普遍的な身体感覚である触覚とモダニズムの交錯を、芸術、文学、哲学の検討を通じて考察。ここではD・H・ロレンス、ヴァルター・ベンヤミンなど異分野の表現者の作品・言説を通じて、触覚がテーマの提供に加えて、内的なロジックを構成していることを明らかにし、西洋的な価値体系の地殻変動に連なっている構図を説く。



A5判 / 312頁 / 3200円
以文社